

資料1 略解「慕いまつる主なるイエスよ」 "Precious Lord, Take My Hand"

作成 2024-08-09 岡本雅幸



ゴスペル音楽の父と呼ばれるトーマス・A・ドーシーは、奴隷制という残酷な歴史をなお引きずる 19 世紀末に生まれました。そして、禁酒法下アル・カポネが酒の密売と暴力により暗躍していたシカゴで、ゴスペル音楽一筋に生きようとした時に起きた深い個人的な悲しみからこの讃美歌が誕生しました。

画像 : <https://ugospel.com/celebrations-honor-the-legacy-of-thomas-dorsey-the-father-of-gospel-music/> よりの転載

■ 1899 年 7 月 1 日 ジョージア州のヴィラ・リーカという小さな村で生まれました。

父親は大学卒の信仰復興集会を主催する巡回牧師、臨時雇いの教師でしたが、二十世紀初頭の黒人集会では献金が集まらず説教師の謝礼は僅かで、一家の暮らしは苦しいものでした。

■ 1910 年アトランタへ移住

一家は働き口を求めてアトランタに移住するも窮乏は続き、子どものドーシーは劇場の売り子として働き、そこでブルースに触れたことが契機となりジャズ・ピアニストの仲間入りを果たしました。

彼は仕事の口がかかれば場所を選ばなかったので、売春宿でストンプ(※足を踏み鳴らし、ジャズ音楽などに合わせて踊るダンス)の伴奏をしたこともあれば、乱痴気ハウス・パーティでも弾いたのです。

■ 1919 年シカゴに移住

1920-30 年代のアメリカは"禁酒法"の影響が国全体に影を落とした時期。国はアルコールのない健全で明るい社会に…なるどころか、マフィアが酒の密売と暴力によって爆発的に勢力を拡大し、シカゴでは暗黒街の帝王アル・カポネが実質的市長といえる存在でした。

そのシカゴでドーシーがピアノを弾くことが出来た場所といえば、相変わらずのハウス・パーティや禁酒法時代に全盛をきわめたシカゴ独特の売春宿。それでもドーシーは賢明な選択をし、シカゴ作曲編曲学校に入学し、ゴスペル・ソング(「イエス・キリストを、福音をみんなで喜ぼう!」)を「天職」として目指します。しかし、教会での歌唱指導やゴスペル・ソングを書くだけではたいした収入にならず、絶えず厳しい現実には曝されていました。

■ 1925 年 8 月結婚

1925 年 8 月、ネッティ・ハーバーと結婚。しかし、生きるために気にそまない仕事もし矛盾を抱えた彼は、翌春神経衰弱により全く仕事ができなくなり、妻のネッティが働き一家の生計を支え、この世に飲み込まれかけた彼を信仰の友・同志が引き上げたのです。病を克服し健康を取り戻したドーシーは、キリスト教信仰を堅持し、ゴスペルに新境地を切り開いていきます。

■ 1932 年 讃美歌の誕生 ～妻と子どもの死を越えて

1930 年代に入ると、大恐慌(1929-1940)にも関わらず、世俗音楽での成功により仕事を選ぶ余裕ができ、ゴスペル音楽だけに専念。1932 年には斬新なゴスペル合唱団を発足させ自ら指揮者に就任し、以後全米各地を旅をして信仰復興集会で働きました。

妻ネッティが一ヶ月後に出産を控え、約 400km 離れたセントルイスでの滞在 2 日目の集会中、出産の妻の計報が届き、戻ると生まれた男の子も亡くなりました。

1973 年、アルバム『プレシャス・ロード:トーマス・A・ドーシーの偉大なゴスペル曲の録音』（コロムビアレコード）のインタビューで、彼はこう語っています。

私はネッティと私たちの小さな男の子を同じ棺と一緒に埋葬しました。そして、私は崩壊しました。何日も私は心を閉ざしました。私は神が私に不当な扱いをしたと感じました。私はもう神に仕えることも、ゴスペルソングを書くこともしたくありませんでした。私はただ、かつてよく知っていたあのジャズの世界に戻りたかったのです…。しかし、「Oh, Lord !」とこの深い悲しみと試練の意味を問うた時、たまたま慰めに來ていた友人が「こんな時だからこそ、あえて『Precious Lord (親愛なる主よ)と呼ぶんだ』と励ましてくれました。この言葉に励まされ、日曜学校時代に習った、ジョージ・アレン(1812-1877)の古い五音音階の讃美歌「Maitland」を思い出し、編曲し、歌詞を添えました。

「愛しき主よ、私の手を取って、導いてください、立たせてください。私は疲れています、私は弱っています、私は疲れ果てています。嵐の中、夜を乗り越えて、私を光へと導いてください。愛しき主よ、私の手を取って、私を家へ導いてください。」

主は私を導いてくださいましたし、皆さんも導いてくださいます。そして、もし皆さんが「尊き主よ、私の手握ってください」を歌ったことがないなら、信仰に立ち思いを込めて歌ってほしいと思います。

この曲は、ドーシーにとって最初のゴスペルの大ヒット作となり、黒人白人の別無く、殆ど全てのゴスペル歌手がこの曲をレコーディングし、40 以上の原語に翻訳され世界各地で歌われてます。

その後、彼は全米各地を巡りゴスペル合唱団を育成しゴスペル・シンガーズ大会も発足させ、彼の曲集はゴスペル音楽界を代表する楽譜出版社二社から出版されました。

■信仰とゴスペル音楽を通じた深い絆

ドーシーは 1939 年から 1944 年にかけてマヘリア・ジャクソンとともに伝道ツアーに参加。

キング牧師は公民権運動にマヘリアを招き、この曲により人々を励まし続け、キング牧師自身も困難な時にはこの曲を歌い慰めを見出し、それが彼の精神的な支えの一つでした。そして、

- ・1968 年 4 月、マヘリアは、キング牧師の葬儀で「Precious Lord」を歌い、
- ・1972 年、マヘリア・ジャクソンの葬式でアレサ・フランクリンが「Precious Lord」を歌いました。

これらは、ゴスペル音楽を通じての深い絆と、彼らが共有した公民権への情熱、そしてアフリカ系アメリカ人コミュニティの精神的霊的力強さの現れです。

■晩年

1979 年以降、ナッシュヴィル・ソングライターズ・アソシエーション・インターナショナルに続きゴスペル音楽協会の殿堂入りも果たします。1982 年には、ニューヨーク・ソングライターズの式典で、ブロードキャスト・ミュージック・インコーポレイテッドから表彰され、十月にはジョージアの殿堂に迎えられました。

1993 年 1 月 23 日、93 歳でドーシーが御国に迎え入れられた時は、ゴスペル音楽にかかわる人々はこの歌で彼の死を悼(いた)んだ。

その後もこの讃美歌は 2007 年にクリスチャン音楽の殿堂入りを果たし、アメリカレコード協会と全米芸術基金による世紀の歌のリストにも選ばれた。2012 年、マヘリア・ジャクソンが歌った「Precious Lord, Take My Hand」のレコーディングはグラミー賞の殿堂賞を受賞しました。

以上